【書評論文】

佐原真『祭りのカネ銅鐸』

講談社　1996. 7. 29　174 p　3500 円　ISBN 4-06-265108-4
［Book Review］SAHARA Makoto, *Ritual Bells Dotaku*, Kodansha, 1996, Tokyo Japan

石橋茂登
ISHIBASHI Shigeto

要旨　鈕の形態変化に基づく分類・編年をはじめとして、銅鐸に関する多くの研究を残した佐原真の著作について論ずる。本書は佐原の銅鐸研究の成果を集大成したものであるとともに、図版を豊富に用いて理解しやすいよう配慮された書である。銅鐸に関する多様な研究分野が手際よくまとめられている。反面、個々の掘り下げはあまり深くないともいえる。本稿では評者の関心ある部分について論じた。

銅鐸群の変遷については佐原の見解が簡潔にまとめられているが、難波を中心とした他の研究者の研究成果が十分取り入れられているとはいえない。鋳型の材質の特徴などについても同様である。中型の材質は前提的に土製と考えているようであるが、評者は調査所見から、やはり外型が石型であっても中型は土で作られていたと考え、佐原らの見解を追認した。佐原が述べる地域の象徴としての青銅器の解釈については、近畿と北部九州がそれほど優位性をもっていたのか疑問がある。

はじめに

本書は、『歴史発掘』シリーズの一書として、銅鐸研究を長年リードしてきた佐原真（1932～2002 年）が、銅鐸の全般的な内容について著したものである。同じ著者の『銅鐸の考古学』（東京大学出版会、2002 年）が論文集であったのに対し、本書は図録『銅鐸の美』（国立歴史民俗博物館、1995 年）の成果を踏まえて、著者が全編新稿で書き下ろしたものである。本書は銅鐸をめぐる様々な視点の研究が要領よくまとめられており、佐原の銅鐸研究の総括であるとともに、銅鐸研究の全体像を俯瞰する格好の書物となっている。

本書の構成は以下のとおりである。まず「カラー図版【祭りのカネ銅鐸】」で写真を豊富に用いつつ概略を述べる。本編は「第 1 章【銅鐸の絵】」として、銅鐸の絵の意味を解釈することから始まる。つづく「第 2 章【銅鐸の紋様】」では袈裟襷文、流水文の変遷と特徴などを説明する。「第 3 章【銅鐸の作り方】」は鋳型、鋳造方法、原材料の入手といった問題を論ずる。「第 4 章【銅鐸の祭り】」においては、聞く銅鐸から見る銅鐸への変化、銅鐸の用途の推定、地域勢力の象徴としての青銅器祭祀といった点を述べている。本編の最初に絵の解釈が配置されているところが後年の佐原らしい構成といえよう。すべてについて論じるには紙幅も足りないので、以下、筆者の関心に応じて述べてゆく。

銅鐸の変遷に関して

銅鐸の形態変化は、佐原によって鈕のルジメント化を基準として大別された。難波洋三らがその後さらに詳細に変遷や銅鐸群について研究している。

本書では基本的に佐原の分類が再提示されている。Ⅲ式（扁平鈕式）を石型（石の鋳型）の１式と土型（土の鋳型）の２式に細分する点は難波分類[1]を引用して[2]提示しているが（p. 108）、Ⅱ式（外縁付鈕式）の細分基準には言及せず（難波は佐原の基準を批判し新たな基準を提示した）、Ⅳ式（突線鈕式）では難波らによって不適切と指摘された兜形鈕（「吊り手の形が半環に近く」、p. 108）をあらためて用いている。本書刊行時点でも難波分類は発表後 10 年が経過しており、銅鐸分類の標準としての地位が確立されていた。意見を異にするのであれば、原材料国産説をめぐって久野雄一郎批判に紙面を割いたごとく（pp. 130-133）、論を立ててほしかったところである。

袈裟襷文について、本書では簡単に 4 区袈裟襷文が古く出現し、新しいものは 6 区袈裟襷文になることを述べている（p. 100）。4 区袈裟襷文銅鐸と 6 区袈裟襷文銅鐸の変遷に関しては難波[3]が 6 区袈裟襷文銅鐸の文様変化による細分と、その祖形として桜ヶ丘４・５号鐸型を設定した。本書ではそれら銅鐸群の細分と系譜についてはほとんど言及されていない。また、新しい段階の銅鐸群である近畿式銅鐸と三遠式銅鐸について、佐原は三遠式銅鐸工人が近畿式銅鐸工人に統合されて最終段階の近畿式銅鐸が成立したという考えを 1960 年代に提唱し[4]、本書でもそれを踏襲している（p. 109）。しかし、難波[5]が指摘したように、近畿式銅鐸に取り入れられる三遠式銅鐸の特徴は横軸突線が鰭まで貫くという１点のみであり、その他の三遠式銅鐸の特徴は一切取り入れられていない。評者は難波に賛成し、三遠式銅鐸工人と近畿式銅鐸工人の統合を想定する必要はないと考える。

かつて、銅鐸の変遷を単一系譜的理解ではなく、銅鐸群の消長として捉えたのは佐原の銅鐸観の卓見であった。しかし本書では、難波を中心としたその後の研究を十分に取り入れたとはいえないようだ。

鋳造方法に関して

銅鐸鋳型は古い段階では石型で、新しい段階は土型に変化する。その変化はⅢ式段階で起こったと考えられている。鋳型そのものが見つかっていない型式の銅鐸であっても、表面の鋳肌やくぼみの状況、文様の線刻などから石型と知ることができるといわれている。Ⅱ式銅鐸のごとき石型で作られた銅鐸は、舞や鈕の付け根、内面突帯の外面部分にくぼみが生じており、石型鋳造製品の特徴となっている。佐原はこのくぼみに関して、石型の場合は土型と違って鋳造に際して生じるガス抜きが難しいので、空気が中に残ってしまい、湯がきちんと回りきらない箇所ができたためだと説明している（p. 122）。これは東奈良遺跡の銅鐸鋳型に関する藤沢真依の見解と同じようだが、難波[6]は藤沢の説を批判している。銅鐸は鋳造するとき鈕を下に湯を流し込むので、舞外面（鋳造時は舞部分の下面にあたる）にガスがたまるとは考えにくいし、内面突帯外面のくぼみもガスがたまることでは説明しがたい。難波によれば、くぼみが生じている箇所は鋳型の構造上、厚肉であるなど

の理由で凝固が遅れるホットスポットにあたる。石型と土型の冷却能の違いにより、石型では凝固時の体積収縮がホットスポットに集中し、そのためにくぼみが特定箇所にできるのだという。傾聴すべき見解であろう。たしかにガスがたまることでは銅鐸外面に生じた特徴的なくぼみをすべて説明するのは難しい。鋳造工学の専門的なことはわからないが、難波の見解は妥当に思える。本書でガスがたまるためにくぼみが生じるという見解だけを紹介しているのは不十分といえる。

また、中型の加工方法について、佐原は２つの可能性を指摘する（p. 119）。ひとつは、外型２枚を合わせた中に土を詰め、外型を外してから鐸身の厚さだけ削って中型とする方法。もうひとつは、外型の内側（文様の面）に薄い粘土を貼り付けておき、土を詰めて中型を作り、粘土の薄板をはがして作る方法。一般的には前者が想定されている製作方法である。後者は工程が複雑で、粘土の薄板だけをきれいに中型・外型からはがすのが難しそうに思える。そのうえ、型持の突出部をその後に造作しなければならない。手間から考えても前者の方法が実際的であろう。佐原がわざわざ２つの可能性を指摘したのは、粘土の薄板を貼り付けていたと思わせる資料があるからなのか、理論的可能性にすぎないのかは、本文からはわからない。評者がいくつかの銅鐸内面を観察した限りでは、後者の方法を積極的に想定すべき痕跡は見つかっていない。近藤喬一[7]も中型の製作方法として前者のみを挙げている。銅鐸の通例の製作方法としては、土を詰めたあと、鐸身の厚さ分を丁寧に削って中型としたのであろう。

また、佐原は型持について「多くは、土の塊を削って中型を作るときに、土を削り残して型持ちにしたようです」としている（p. 120）。ただし、兵庫県気比２号鐸については、型持の孔の周縁が突出しており、それは「別作りの型持を使ったため」とみている。その細部写真が掲載されていないのが惜しい。評者は気比２号鐸を内側から観察したことがないので何とも言えないが、銅鐸のなかには型持孔の内面周縁部がわずかに堤状に盛り上がっているものがある（写真１・２）。堤状ということは、すなわち中型表面では溝状だったことになる。型持を整形した際の痕跡であろう。この痕跡は、型持を削り出したか、土を貼り付けて一体にして整形したことを示している。佐原のいう「別作り」がこのようなものを指すのかどうかはわからない。

ところで、Ⅱ―１式の加茂岩倉 38 号鐸（写真３）の舞面型持孔は明らかに鈕の方向に対して斜めについている。同笵の 39 号鐸も類似した状況である。型持を削り出したにせよ、別作りの型持を用いたにせよ、なぜ斜めにしたのかは不明である。この長方形の型持孔の周囲に、ナデのような痕跡が見える。38 号鐸のようなⅡ―１式銅鐸は外型が石製である。先に挙げた 31 号鐸も石型と考えられている。このような石型で鋳造される青銅器について、先行研究はいずれも中型の材質は土だという前提で述べており、石製の中型という可能性について検討したものはないように思う。難波も「内型は一貫して土製である」と述べている[8]。この写真でみるナデのような痕跡は、中型が土製であることの証拠と考えられる。評者がいくつか実物観察した結果からは、やはり石型の銅鐸でも土で中型を作っていると考えるのが妥当である。

次に補刻について述べる。銅鐸のなかには、文様がうまく鋳出されず不鮮明になる場合がある。そのような文様不鮮明な箇所については、タガネのような鋭利な工具で文様を刻む、補刻と呼ぶ行為がしばしば行われる。佐原は、このような補刻について、絵画は不鮮

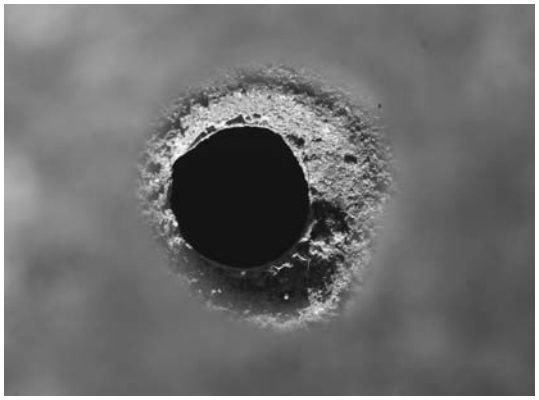

写真 1　加茂岩倉 31 号鐸（鐸身外面から反対側の内面を覗いた写真）

写真 2　加茂岩倉 34 号鐸裾内面

明であっても補刻しないことを指摘している（p. 53）。一方で、袈裟襷文や流水文といった文様の補刻は多くみられる。そこから佐原は「弥生の人々にとって、銅鐸が祭りのカネとしての役目を果たすためには、決まりの通りに紋様[9]を仕上げることこそ、大切だったのです。」とした（p. 123）。

佐原が述べるように、絵画の補刻に対して文様の補刻は非常に例が多い。しかし、文様が銅鐸の機能と一体不可分のものであるかどうかは推測の域を出ない。なんらかの意味があったと考えるのは一応妥当としても、「役目を果たすためには、決まりの通りに紋様を仕上げることこそ、大切だった」というほど重要なものだったとは限らない。文様が不鮮明・不完全な鋳上がりでありながら、補刻されていない銅鐸もあるからである。

なお補刻・補鋳については、本書刊行後だが、難波洋三[10]が型式変化に対応して技法や頻度が変化することを明らかにし、研究が大きく前進した。

続いて原材料について述べる。銅鐸の原材料が日本産か輸入品か、輸入品としても中国産か朝鮮半島産なのかといった点は重要な問題である。佐原は馬淵・平尾の鉛同位体比分析による産地同定の研究成果を紹介している（pp. 126-133）。馬淵の他の論文[11]も参照すれば、Ⅰ式・Ⅱ―１式は朝鮮系の鉛、Ⅱ―２式～Ⅳ―１式が中国華北系の鉛、近畿式・三遠式が華北系の中でも画一的な鉛を使用しているとの結果である。また、後期の銅鐸ほど成分中のスズが少なくなることの説明として、製品を原料にして何度も鋳返すとスズが減少すると言われていた。しかしこの説は実験によって否定された。さらに、鉛同位体比が時期によって変化することから、後期の銅鐸は初期の青銅器を鋳返して製作したという可能性も否定された。馬淵によれば、国産青銅器の初期には輸入青銅器を原材料とした可能性も含めて朝鮮系の原材料を用いた。中期は中国系の原材料だが、成分比にばらつきがあることなどから、輸入地金を使用したとみられる。その次の段階では、鉛同位体比や成分が画一化するので、調合された画一的な輸入地金を用いたという。このように、馬淵らの研究成果は弥生時代の青銅器のみならず、大陸との関係まで知る手がかりとなる重要なものである。また、現在の銅鐸の型式分類・変遷と鉛同位体比のグルーピング・変遷はよく対応しており、考古学的手法と理化学的分析の相互補完の点からも注目される。だが、本書では馬淵らに反対意見を述べていた久野雄一郎批判にページを割き、佐原の銅鐸編年と鉛同位体比の研究成果が一致するので編年は変更の必要がない、という結論で締めくくら

写真 3　加茂岩倉 38 号鐸内面

れている。鉛同位体比研究そのものの成果と課題などの記述がもう少しほしかった。

北部九州で生産されていた銅矛と近畿式・三遠式の銅鐸とが同様の原材料で作られているという馬淵の指摘は弥生社会の復元の上で重要である。鋳型の材質は北部九州が石型、近畿・東海地方では中段階の銅鐸以後は土型に変化するが、銅矛・近畿式銅鐸・三遠式銅鐸で原材料が共通の画一的なものだったとなると、鋳造技術の交流・伝播と、原材料の動きは相関関係にない可能性がある。一方で大阪府東奈良遺跡では、年代は詳細に押さえられないというが、石型の銅鐸鋳型と土型の銅戈鋳型が出土している。鋳造技術の伝播や変化といった点は大きな問題でありながら十分研究されているとはいえない。そのような点も本書で触れてほしかったところである。

文様と銅鐸の役割に関して

佐原は銅鐸の文様の意味を読み解くことを重視している。銅鐸の文様が何を意味していたかがわかれば、銅鐸祭祀の理解が飛躍的に進むであろう。しかし精神世界を物質資料から窺うことは容易ではない。その困難な側面に挑戦した成果として、佐原は春成秀爾と寺沢薫の解釈をあげ、「現在の到達点」と評価した。それによれば（p. 104）、袈裟襷文は帯そのものであり、「中にあるもの」を結びとめる働きをもつ。流水文も同じである。「中にあるもの」とは穀霊＝稲魂であり、それを結びとめる呪器だというのである。

銅鐸と農耕が関係あった可能性は当然あるし、評者には上記の説が妥当かどうか判断しかねる。しかし、島根県荒神谷遺跡や兵庫県桜ケ丘遺跡、長野県柳沢遺跡など、銅鐸と武器形青銅器が共伴している例が多くあることを鑑みれば、銅鐸の袈裟襷文が帯そのものを表し、中にある稲魂を結びとめるのだという解釈は、銅鐸を説明できるとしても、袈裟襷文や流水文を持たない武器形青銅器の意味は不明のままである。共伴例ならば銅鐸と武器形青銅器は役割が違うという解釈もできようが、武器形青銅器だけが埋納されている遺構もある。結局、武器形青銅器とは何なのかということもあわせて説明しなければ、銅鐸の説明も不完全となるだろう。

佐原はまた、地域勢力の象徴として銅鐸や武器型青銅器を理解している。佐原は近藤喬一の説（p. 151）、すなわち、まず武器と鳴り物とを祭りの象徴に使い、のちに地域ごとに独自の祭りの象徴をもつようになったという説を紹介している。北部九州が矛形祭器、瀬戸内海沿岸が平形銅剣、中国地方の日本海沿岸が出雲型剣形祭器、近畿地方が近畿式銅鐸、東海地方が三遠式銅鐸を象徴としたという。ところがこの近藤説には、岩永省三による批判がある[12]。それによれば、広形銅矛・出雲型銅剣（中細形銅剣Ｃ類）・近畿式銅鐸・三遠式銅鐸の共時性には疑問があり、近藤自身が平形銅剣や出雲型銅剣が扁平鈕式銅鐸の

年代を大きく下らない年代観を提示しているという。だとすれば、佐原が提示した大枠は、時期が異なる青銅器の分布圏を重ねていることになる。岩永の批判は本書刊行の10年以上前のものであり、やはり中段階の銅鐸・銅矛・出雲型銅剣・大阪湾型銅戈が並存する段階と、銅矛・近畿式銅鐸・三遠式銅鐸が並存し、出雲・吉備などは墳丘墓祭祀に移行した段階にわけて理解するべきであろう。

その問題はおくとして、佐原は、各勢力が力を誇示するために象徴としての祭器をつくり、他地域に働きかけたと考えている（pp. 151-154）。それによれば出雲は北部九州の矛形祭器と近畿の銅鐸とをあわせもって「両方に顔を立て」、自前の象徴として出雲型剣形祭器を大量に製作し「各地に配って、出雲の力を誇示したかったのでしょう。しかし、それには及ばず、一まとめに埋納することになりました」と考えた（p. 152）。銅鐸は稲魂をつなぎとめるものであるが、地域の象徴として他地域への働きかけに使われるものとなった、ということであろうか。というより、本書を読んでいると銅鐸が稲魂をつなぎとめるかどうかなど、弥生人にとって重要な問題ではないという気がしてくる。畿内の銅鐸か、北部九州の銅矛か、出雲の銅剣か、何をもつかこそが重要だったということになる。稲魂を銅鐸の中につなぎとめることが重要なら、そもそも銅鐸以外の青銅器は選択肢としてありえないだろう。

弥生時代の社会が、佐原の描くほどに畿内と北部九州がまとまった勢力かつ優位な存在で、出雲は両者に顔をたてて象徴を押し付けられるような弱い立場だったかどうかは、再考の余地があるのではないか。東海地方についても同様であり、「要するに、弥生青銅器を作った畿内・北部九州は、中国・四国・東海に自らの象徴である祭器を所有させることによって、自らとのつながりを明らかにさせることを意図したかのようです」（p. 154）というのが佐原の解釈である。ところが、三遠式銅鐸と近畿式銅鐸は共伴例や近接埋納例があり、近畿を選ぶか東海を選ぶかといった二者択一的な様相ではない[13]。荒神谷遺跡でも北部九州の銅矛と近畿の銅鐸が同一埋納坑にあり、出雲型銅剣が近接埋納されていた。ある勢力との「つながりを明らかにさせる」象徴が、他の勢力とのつながりを明示する象徴と並べて埋納されているとすれば、不可解である。あえて解釈するなら、出雲と、畿内・北部九州の対等性を読み取る方が出土状況とのバランスが取れそうにも思える。

佐原の論では、地域間の力関係によって、使用する青銅器が決まると読める。近畿式銅鐸が近畿勢力とのつながりを示すものとして、働きかけによって各地にもたらされたのならば、まるで三角縁神獣鏡の配布を思わせ、なぜ古墳時代に存続しないのかという疑問がいよいよ強くなる。もちろん青銅器祭祀は地域勢力の動向と無関係ではないが、勢力間の優劣によってもたらされるものなのかどうかは更に検討が必要である。

おわりに

以上、批判的なことばかり書いてきたが、本書は佐原の研究をまとめた書として銅鐸を概観するために有益である。文化人類学的な手法を得意とする佐原の持ち味が生かされた内容でもある。しかし、他の研究者の成果については必ずしも十分汲み取っているとはいえない部分もあった。

佐原は本書の後半で象徴としての祭器の理解はいまだ素描であり、「土器やお墓の地方

色・変遷と対応させることによって、銅鐸・武器形祭器が弥生社会で果たした役割を、さらに明らかにしたい」とも述べている（p. 154）。評者も同感である。銅鐸だけで考えるのではなく武器形青銅器などもあわせて考えねばならないし、青銅器だけで論じるのではなく他の諸事象ともあわせて考えてゆかねばならない。佐原が後進の研究者に残した大きな課題といえる。

---

[1] 難波洋三「銅鐸」『弥生文化の研究』６、雄山閣出版、1986 年。
[2] 正確に言えば、佐原がいう「石の鋳型で作ったⅢ―１式と土の鋳型で作ったⅢ―２式に分ける」という基準は難波論文（註１文献）には明記されていない。難波は扁平鈕式のうち、４区袈裟襷文銅鐸と流水文銅鐸には石型と土型の両方があり、６区袈裟襷文銅鐸は土型のみだと指摘する（p. 140）。６区袈裟襷文銅鐸正統派は文様構成から 1a 式、1b 式、２式に細分する（p. 141）。そして４区袈裟襷文銅鐸が６区袈裟襷文銅鐸正統派 1b 式併行の時期までは作られていたとする（p. 143）。したがって、扁平鈕式６区袈裟襷文銅鐸正統派１式および併行する銅鐸の時期には石型または土型で鋳造しており、同２式は土型だけの時期ということになる。扁平鈕式全体を１式（石型）・２式（土型）に大別することは記されていない。
[3] 註１文献（難波 1986）、pp. 141-143。
[4] 佐原真「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系』２、平凡社、1960 年。
[5] 註１文献（難波 1986）、p. 144。
[6] 註１文献（難波 1986）、p. 139。
[7] 近藤喬一「鋳造の技術」『弥生文化の研究』６、雄山閣出版、1986 年。
[8] 註１文献（難波 1986）、p. 138。
[9] 佐原は文様を「紋様」と記している。「流水文」などもすべて「流水紋」などとしている。本稿では引用箇所以外、「紋」ではなく「文」を用いる。
[10] 難波洋三「同笵銅鐸の展開」『シルクロード学研究叢書』３、シルクロード学研究財団、2000 年、pp. 18-20。
[11] 馬淵久夫「青銅器の材料」『弥生文化の研究』６、雄山閣出版、1986 年。
[12] 岩永省三「剣形祭器」『弥生文化の研究』６、雄山閣出版、1986 年、p. 112。
[13] 石橋茂登「東海地方の突線鈕式銅鐸について」『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会、2004 年。